

武者小路實篤選集

第一卷

武者小路実篤選集 第一卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 1 卷

昭和39年9月30日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 武者小路実篤

発行者 真鍋謙二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 河上製本工場

東京都新宿区納戸町五番地

発行所 図書出版 株式 青銅社

電話 二六〇局 八七六五番
振替 東京 三四、八九二番

Printed in Japan ©

青銅社で僕の選集を出すに際して

僕の選集をまた出したいと言うので僕は喜んで承諾した。本は無理に買わせるものではない。読みたい人がいるから本を出すわけだ。読みたい人が多くいてくれる事は作者として仕事し甲斐のある話である。僕は自分の書きたい事なるべく正直にかく事になっている。自分が一心になって書ける事は、自分が作家として書くだけの甲斐のある仕事だと思っている。そして作者が一心になれるという事は読者も一心になって読める事を意味していると僕は信じている。だから僕は純粹の気持ちで一心に書けるものを、その時その時に書いて来た事に自信を持っているわけだ。僕はこの選集によって、新しい読者を得る事を信じ喜んでいる。文学書は読みたい人だけが読めばいいのだと思っている。僕はこの世に生まれ文学の仕事をした以上、文学を通して出来るだけ多くの人に生きる力と喜びを捧げたいと思っている。そして人間に生まれた人に祝福を送りたいと思う。しかしその祝福は真心から真心に通じるものでなければならぬと思っている。僕は人生の無常を知らされているが、この世に生まれた事はよかったですと思っている。人間のために少しでも働ける事を喜んでいるのである。

昭和三十九年五月十二日

武者小路実篤

武者小路実篤選集・第一卷

目次

お目出たき人

7

世間知らず

67

或る日の一休

195

わしも知らない

209

二十八歳の耶蘇

231

初恋

247

三和尚

279

その妹

291

花咲爺

413

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

お目出たき人

高島平三郎先生に
この小冊子を
千の感謝を以て奉る。

一月二十九日の朝、丸善に行っているの本を捜した末、ムンチという人の書いた「文明と教育」という本を買って丸善を出た。出て右に曲って少し来て、四つ角の所へ来た時、右に折れようか、真直ぐ行こうかと思いつながらちょっと右の道を見る。二三十間先に美しい華やかな着物を着た若い二人の女が立ちどまって、誰か待っているようだった。自分の足は右に向いた。その時自分はその女を芸者だろうと思った。お白粉を濃くぬった円い顔した、華やかな着物を着ている女を見ると自分は芸者にきめてしまう。

二人とも美しくはなかった。しかし醜い女でもなかった。肉づきのいい、ちょっと愛嬌のある顔をしていた。殊に一人の方は可愛いところがあった。

自分は二人のいる所を過ぎる時にちょっと何げなくそっちを見た。そうしてその時心のなかで言った。

自分は女に餓えている。

誠に自分は女に餓えている。残念ながら美しい女、若い女に餓えている。七年前に自分の十九歳の時恋していた月子さんが故郷に帰った以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に餓えている。

自分は早足で濠にぶつかって電車道について左に折れて電車にのらずに日比谷にゆき日比谷公園をぬけて自家に向かった。

日比谷をぬける時、若い夫婦の楽しそうに話しているのにあつた。自分は心ココロ私かに彼等の幸福を祝するよりも羨ましく思った。羨ましく思うよりも呪つた。その気持ちは貧者が富者に対する気持ちと同じではないかと思つた。淋しい自分の心の調べの華やかなる調子で乱される時に、その乱すものを呪わないではいられない。彼等は自分に自分の淋しさを面オモてのあたりに知らせる。痛切に感じさせる。自分の失恋の旧傷をいためる。

自分は彼等を祝しようと思う、しかし面前に見る時ややもすると呪いたくなる。

自分は女に餓えているのだ。

自分は鶴のことを考えながら自家に歸つた。

鶴は自家の近所に住んでいた美しい可憐な女である。自分は鶴と話したことはない。月子さんがまだ東京にいた時分から自分は鶴を知っていた。その時分は勿論恋してはいなかったが可愛い子供だと思つていた。逢う度にいい感じがして、何時でも逢つた暫くは鶴のことを思つていた。しかしすぐ忘れてしまつていた。ところが月子さんが故郷に歸つてから三年目失恋の苦がうすらぐと共に鶴がますます可憐に見え、可愛らしく見え、鶴に逢わない時は淋しくなつた。

自分はその時分から鶴と夫婦になりたく思うようになった。鶴ほど自分の妻に向く人はないように思われて来た。自分の個性をまげずに鶴とならば夫婦になれるように思われて来た。かくて自分の憧れている理想の妻として鶴は自分の目に映ずるようになった。

女に餓えている自分はここに対象を得た、その後ますます鶴を愛するようになり、恋するようになった。そうして自分の妻になることが鶴にとつても幸福のように思えて来た。

自分が鶴と夫婦になりたいと思った時に先ず心配したのは近所の人に冷笑されることだった。話の種にされることであつた。歩く度に後ろ指をさされることであつた。

しかし自分はそんなことを顧慮して自分と鶴の幸福を捨てるのは馬鹿氣でいると思つた。意氣地のない話と思つた。自分は断じて近所の人を恐れないで見せる。自分は近所の人、口さがなき俵屋の女房かづさん、のらくらしている書生、出入りの八百屋、いたずら小僧、そういう人にも後ろ指をさされたり、悪口言われたり、嘲笑されたりすることを平然として甘受して見せようと思つた。

次に自分は母を恐れた。母は世間を恐れる人だ。近所の物笑いになることは母には耐えがたいことだ。しかし自分を愛する母は自分の決心一つでどうでもなると思つた。

母さえ味方にすれば世間を馬鹿にしている父は承知するだろうと思つた。

かくて自分は鶴を妻にするために出来るだけ骨折ろうと思つた。翌年のくれに母を承知させ、その翌年の春に父を承知させ、その夏、間に人をたてて鶴の自家に求婚してもらふことになつた。

自分はそこまで思つたより容易に事が運んだので、十が九までうまくゆくと思つていた。そのうちには自分の家の彼女の家よりもすべての点において優つているという自覚も手伝つていた。そうして自分はうまくゆく暇を考へて、嬉しき夢と、甘き夢と、くすぐったい夢を見ていた。

始めて逢ふ時のこと、お互いに感じていたことをうちあける時のこと、最初の接吻の時のこと……そんなことさえ空想することがあつた。友のする風評、近所の人の風評も想像して見た。父や母や兄や姉や姪に対する鶴の態度も想像して見た。すべての想像は華やかな、明るい、甘い、そうしてまばゆい氣まりのゐるものであつた。

間に立った人は七月の下旬に鶴の家に行つて下さった。そうして無愛想に「何しろまだ若いのですから、今からそんな話にのりたくありません」とことわられてしまった。此方の名を言わなかったのが、せめてものもうけものにして、自分はそのことがあってからも二度目に鶴に逢った時は、以前と同じ程度に図々しく鶴の顔を見る事が出来た。

その年の秋、鶴の一家は自分の家の近所から、一里ほどはなれた所に引越してしまった。引越された当座は何だか自分が求婚したのが気がついて、不快に思つて引越して行つたような気がして淋しかった。また彼女に逢う機会の少ないのが淋しかった。自分は気まりのわるい思いをして翌年の三月まで毎月一度ぐらい何気なく彼女の学校の帰りに逢いに行つた。逢えない時には毎週一度ぐらい逢いに出かけることもあった。しかしそれ以上逢いに行くほど図々しくはなれなかった。

その三月に再び間に立つ人——その人は川路と言つた——に鶴の家に行つて戴いて、求婚して戴いた、今度はこっちの名を言つた。そうして結婚するのは何時まで待ってもいいと言つた。自分は鶴を恋していた。そうして女に餓えていた自分は一日も早く鶴とせめて許嫁になりたかつた。その上にその春鶴は学校を卒業するように聞いていたから。

しかし鶴はその春、まだ学校を卒業しないのだそうだ。そうして兄が結婚するまではそういう話を聞くのさえないやだという先方の答えだつたと聞いた。その後一度、偶然に甲武電車で逢つた。それは四月四日だつた。その後鶴には逢わない。

その後鶴の話はそのままになっている。自分には望みがあるようにもないようにも思える。自分と鶴の関係はあらまし以上のようなものだ。

自分はまだ、いわゆる女を知らない。

夢の中で女の裸を見ることがある。しかしその女は純粹の女ではなく中性である。

自分は今年二十六歳である。

自分は女に餓えている。

自分はこの餓えを鶴が十二分に癒してくれることを信じて疑わない。だから一年近く鶴に逢わないでも鶴を恋している。逢わないためにか鶴はますます自分の理想の女に近づいてきた。

だから今のところ、この話のきまるまでは何年たとうとも他の女と夫婦になろうとは思わない。

しかし自分は女に餓えている。鶴以外の若い美しい女は瞬間的に可なりつよく自分をひきつける。また年増の女でも、そう美しくない人でも或る瞬間にはかなりの力をもって自分をひきつける。

自然は男と女をつくった。互いに惹きつけるようにつくった。これがために自分は淋しく思うことも、苦しく思うこともある、しかし自分は自然が男と女をつくったことを感謝する。互いに強くひきつける力を感謝する。もし地上に女がなかったら。愛し得るものがなかったら。恋し得るものがなかったら。そうして我利々々亡者ばかりが集まっていたら、いかに淋しいであろう。

女によって墮落する人もある。しかし女あって生きられる人が何人あるか知れない。女あって生まれた甲斐を知った人が何人あるか知れない。女そのものはつまらぬものかも知れない。(男の如く、否それ以上に)しかし男と女の間には何かある。

誠に女は男にとって「永遠の偶像」である。

「アダム」は「イヴ」によって楽園から逐い出されたかも知れない。しかし一人で楽園に居るよりはイヴと共に楽園を逐い出された方がアダムにとって幸福だったかも知れない。

女そのものは知らない、しかし女の男に与える力は知っている。女そのものは力のないものかも知れない。しかし女の男に与える力は強い。

いわゆる女を知らないせい、自分は理想の女を崇拜する。その肉と心を崇拜する。そうしてその理想的の女として自分の知れる範囲において鶴は第一の人である。

鶴に幸いあれ！

しかし自分はいくら女に餓えているからと言って、いくら鶴を恋しているからと言って、自分の仕事をすてまで鶴を得ようとは思わない。自分は鶴以上に自我を愛している。いくら淋しくとも自我を犠牲にしてまで鶴を得ようとは思わない。三度の飯を二度にへらしても、いかなる陋屋に住もうとも、鶴と夫婦になりたい。しかし自我を犠牲にしてまで鶴と一緒にしろうとは思わない。

女に餓えて女の力を知り、女の力を知って、自我の力を自分は知ることが出来た。

しかし女の柔かき円味ある身体。優しき心。なまめかしき香。人の心をとかす心。ああ女と舞踏たんちえんがしたい、全身全心を。いじけない前に春が来てくれないと困る。

自分は自我を発展させるためにも鶴を要求するものである。

二

自家に帰るとまもなく昼飯だった。